

1. 蔵の街まで

11 月 16 日、前日の夜は雨が降っていたものの、朝からはそれを忘れてしまうような青空と太陽が見えたこの日、私は、埼玉県南西部の川越の街へと行ってきた。



上簡略図をご覧ください。都内からアクセスする方法はいくらかあるが、今回、私は池袋から東武東上線で川越まで向かった。朝～午後 10 時台に約 15 分置きごとに池袋から発車する「急行」を使ったのだが、想像していたよりも早く、30 分程で川越に到着した。しかも運賃は片道 500 円程度。これなら休日の小旅行に都内からも行きやすい。もっと小旅行気分を味わいたく感じたら、西武新宿駅からのオールクロスシートの特急「小江戸」に乗り試してみてもいいかもしれない。



さて、11 時少し前に川越駅に到着した。川越駅から時の鐘や蔵造りの街並みが楽しめる蔵の街には、徒歩圏内でもあるそうなのだが、色々な所を見て回るために、私はバスを探し始めた。

バスが 2 台写っている左の写真をご覧頂いてもわかる通り、川越駅からはたくさんの蔵の街を通るバスがある。案内所でかなり便数がある事を聞いた通り、東口のバス乗り場へ向かうと早速 1 台の蔵の街を

通るバスが停まっていた。運転手の方も親切で、私が蔵の街にバスが停まるか確認すると、丁寧に停まると答えてくれた。乗車後も、いわゆる蔵の街中心部の「一番街」で降りる際も停留所名が「蔵の街」ではないからか、蔵の街の入り口でありここで降りるべきだということも教えてくれ、この時点で、私の川越に対しての気持ちや期待は非常に高まっていた。

「一番街」のバス停で降り、まず目に飛び込んできたものは、日銀本店を思い起こすような青緑色のドームと、白の壁の洋風建築が印象的な登録有形文化財、埼玉りそな銀行・川越支店だ。色が日銀本店のようだと私が感じたのも当然で、この埼玉りそな銀行川越支店は、東京駅や日銀本店を設計した辰野金吾(1854-1919)に師事した保岡勝也(1877-1942)が設計した。

彼は三菱社(現三菱地所)に入社し、丸の内三菱赤レンガオフィス建築を設計したり、清澄白河に岩崎家深川別邸(現清澄庭園内「涼亭」^{りょうてい})を設計した人物だ。その後彼は 1912(明治 45)年に三菱社を退社したが、1915(大正 4)年から 1936(昭和 11)年にかけて、川越の 4 つの建築の設計を手掛けた。そのうち 3 つが現存している。川越から帰ってくるまでこういった歴史を知らず、今回は写真の埼玉りそな銀行川越支店のみしか意識して見られなかったのが残念である。次の機会に川越に行く際は、必ず他の 2 つの建築物も見てみたい。



この川越の蔵の街の一帯約 7.8ha のエリアは、文部科学省の外庁の文化庁により、全国で現在 110 地区ある「重要伝統的建造物群保存地区」の一つに指定されている。このことにより、税制優遇措置や補助が受けられ、今もなお熱心に江戸時代から大正時代頃までの建築物が残され、そして維持されている。

そして次は蔵の街のシンボルである時の鐘…とご紹介させて頂きたいのだが、今回の川越散策で訪れた場所を、川越の歴史の時系列に沿って見て行きたい。この蔵の街が形成されていったのも、実は江戸時代末期～明治期、と実は川越全体の歴史と比べてみるとごくごく最近のことなのである。

2. 川越氷川神社と三芳野神社 ―平安時代―



この川越は旧石器時代から人が住んでいた形跡がある。主要な古墳群だけでも4つあるという程、遺跡や古墳の数もそれに応じてとても多い。だが今回の散策では川越駅から古墳群が離れていたこともあり、行けなかった。今回は、川越駅から見て冒頭の地図でも示したように北部から北東部にかけて散策したので、そのエリアから見る川越の歴史を見てみよう。この日訪ねた箇所を作られた年代とともに本レポート末に地図としてまとめてみたので、お時間の許す方は確認して頂けると、拙筆の一助となるかもしれない。

さて、川越駅北部の私が行くことができた各スポットの中で、一番昔に築かれた場所はどこか。それぞれの設立年を調べると、最も古くからあるスポットは、川越氷川神社であった。左上の写真の勝海舟の直筆による社号がかけられ、15mを誇る杉で造られた大鳥居こそ平成に建立されたものではあるが、氷川神社自体が創建されたのは、なんと今からおよそ1500年前、百済から日本に仏教が伝来した頃の541年である。

氷川神社には五柱の神様がお祀りされているそうなのだが、その中でも主祭神は日本神話の神であり、伊弉諾尊・伊弉冉尊の子・天照大神の弟である素戔嗚尊である。他には彼の妃である奇稲田姫命、そして彼女の両親の脚摩乳命、手摩乳命、そして素戔嗚尊と奇稲田姫命の息子である大己貴命の合わせて五柱の神様が祀られている。これら五柱の神様は家族であるので、この川越氷川神社は家族円満の神様、または夫婦の神様がいたので夫婦円満・縁結びの神

様として信仰されているようだ。

なるほど、そのような言われがあるからか、左下の写真のような「良縁 あい鯛みくじ」が販売されていた。かわいい鯛ではあるが、大きな鯛に貼られている札のダジャレには個人的に笑ってしまった。またその奥には普通のおみくじと思われる真っ赤な「一年安鯛」が控えている…。

こんなユーモアを残しつつも、同時に境内には数々の貴重で興味深いものがある。まずは右下写真の犬の横顔の形をしている「戌岩」だ。なんと本殿の方向を向いている。犬はお産が軽く、また多産であることから、安産祈願の象徴と、この氷川神社ではさ



れているそうだ。



そしてもう一つ、私が引かれたのは、万葉集に多くの歌を残した歌人、柿本人麻呂かきのもとひと まろを祀る柿本人麻呂神社があることだ。この川越に戦国時代、直系の子孫である綾部家の人々が移住してきたことから、安産・火防・学問・そして歌道の神様として祀られるようになったそうである。年中行事がこの氷川神社では数多くあるが、4月には柿本人麻呂祭というものも行われている。他にも16社の摂社せつしゃや末社まつしゃがここ氷川神社にはあるので、自身の願いや状況に応じて、訪ねてみてもいいのではないだろうか。また、この日は平日にも関わらず、季節柄七五三詣に來ている家族連れも多かった。

このように歴史があり、たくさんの神様がおられるからか、はたまた近いからか、室町時代の1457年に太田道真みちざね・道灌親子により川越城が築城されて以来、川越氷川神社は城下の守護神・総鎮守として城主によって崇められてきた。

次に紹介する806-810年頃に建立されたという氷川神社から南東の方角にある三芳野神社みよしのみや(左写真)も太田道灌・そして川越城に関係が深い。元々は周辺地域の惣社として建造され、以来敬われ親しまれてきた。そんな三芳野神社を、太田道灌は川越城築城に際して城内に取り込み、鎮守とした。江戸時代にも、そのまま城内にあり、幕府直轄の神社とされ、1624(寛永元年)年に城主酒井忠勝が現在に残る本殿を築いた。

ところで、地図を見てもわかるかと思うが、三芳野神社と川越城本丸御殿は目と鼻の先、50mもない程である。しかし本丸と直線距離では近いといっても、当時は庶民が三芳野神社でお参りをするには、長く細い入り組んだ道を見張りの兵を付けられた上で、行かなければならなかった。こんな出来事から、「行きはよいよい 帰りは怖い」のフレーズが有名



な童謡「とおりゃんせ」が誕生したという。

3. 河越氏の時代から太田道灌、そして川越城 ―平安時代、鎌倉時代、室町時代―

さて、先ほどからちらほらと太田道灌の名前が出てきているが、彼は一体何者であり、川越城築城を含めどんなことをしてきたのか。少しか平安・鎌倉時代、そして彼と彼が生きた室町時代前後の川越の歴史に焦点を当ててみよう。

三芳野神社が置かれた平安時代から以降の鎌倉時代にかけて、川越地域は第50代天皇桓武天皇(781~806 在位、794年に平安京に遷都・坂上田村麻呂を征夷大將軍として東北に派遣したことなどで知られる)の桓武平氏の流れを汲む秩父氏が秩父盆地からこの地へ進出し、荘園支配を進めていったことにより、歴史に名を刻むようになっていった。川越の地名の由来の一つにも、この秩父氏が地方豪族として「河越」姓を名乗り大きな勢力となっていたことに由来する。ちなみに話は脱線してしまうが、11月にアップロードした大江戸活粋パレードのレポートでも紹介した、鎌倉時代現在の渋谷一帯を所領していた渋谷氏もこの桓武平氏の流れを汲んでいる。

さて話は戻り、この河越氏は鎌倉時代までは平氏側につき、そして鎌倉時代からは源氏側につき川越地方を実質支配していた。しかし荘園の權益を維持し、関東最大の勢力を誇っていたこの河越氏も、治安維持役であった相模国守護職から解任される等、室町時代に入ると、幕府に冷遇されてしまうようになる。そんな河越氏は、南北朝時代に入り20年程経った1368(応安元年)年、同じく冷遇された関東の武将とともに、盟主となって室町幕府に対して武蔵平一揆へいいつまを起こしたものの、敗退し、伊勢に

逃がれ、この河越氏は「歴史」から姿を消していった。

残念ながらここに、この平安時代～室町時代にかけての河越館跡、秩父氏の嫡流であり平安時代の武将河越重頼、平氏との合戦で活躍した源義経、そして重頼の娘であり義経の正室である京姫の供養塔のある常楽寺等、河越氏にまつわる歴史建造物等を今回の川越散策では訪れることが出来ず、文字だけの紹介となってしまったことは心苦しい。

その後 1 世紀程時は移り、太田道灌が生きた室町時代に足を移す。室町幕府の関東における統治役であった関東管領という役職が、前述の武蔵平一揆の制圧で功績を挙げていた上杉氏の世襲制となり、上杉氏は関東にて大きな力を持っていた。その

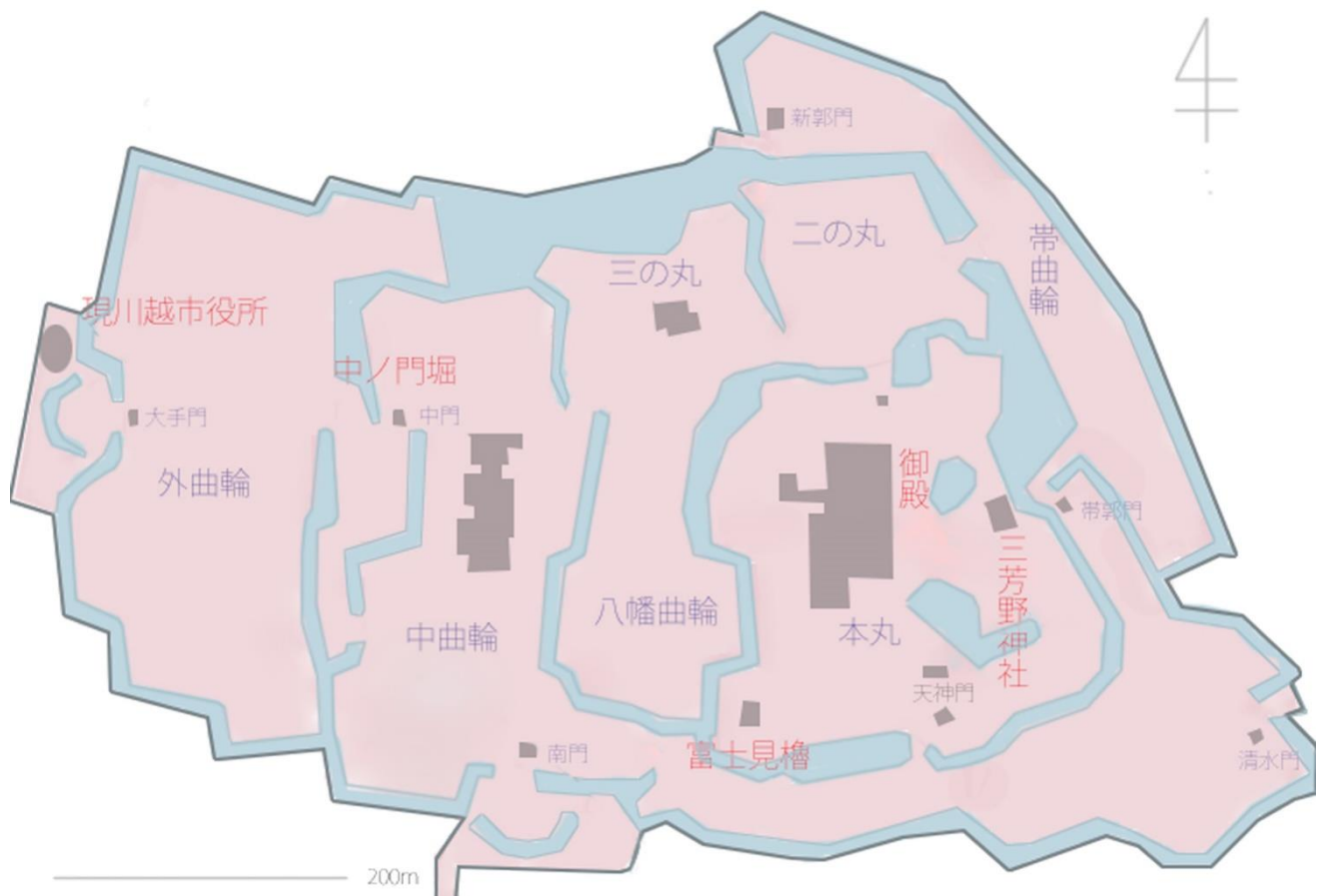


太田道灌像(川越市役所)

ため、1400 年代に入ると、上杉氏は、室町幕府、すなわち足利氏と対立するようになっていった。そんな中の 1432 年、鎌倉の扇谷^{おうぎがや}という所に居住していた扇谷上杉家の家宰(家政を取り仕切る役割)を務めていた太田家に太田道灌^{もちのち}が誕生した。

彼はすくすくと成長していった。頭脳も明晰で、特に兵法に精通していたという。そこを見入られ、彼は扇谷上杉家の持朝^{もちとも}から、足利成氏^{しげうじ}の勢力に対抗するため、川越に川越城を築城することを命じられた。当時は利根川周辺(現在こそ利根川は東遷され銚子方面へ流れているが、当時は東京湾が河口であった)を境に足利氏と上杉氏是对立しており、川越はその要衝の一つであった。また、同時期に太田道灌は同じく足利氏に対抗するために旧利根川河口に、ご存知江戸城を築城した。

さて、そんな川越城は一体どんな城だったのだろうか。



図は慶応 3 年(1867 年)の川越城内部の図を参考に作成したものである。太田道灌がこの川越城を築城した当時は、この

図より小さく、本丸と二の丸を合わせ程度だったという。

この図程(4万6000坪)の巨大な城となったのは、寛永16(1639年)年に川越城主となった、松平信綱により拡張されてからである。

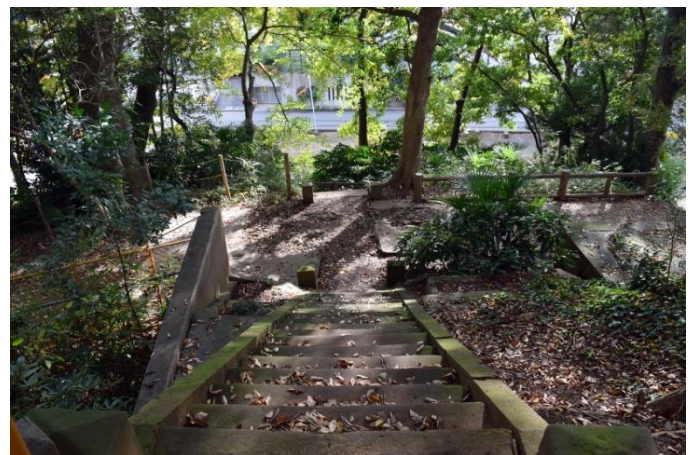
現在、川越城は明治維新後解体されたり、堀も埋められてしまったため当時を感じられる建造物はかなり少なくなっている。ここでは、残されている建造物の一部をご紹介します。



上写真は本丸御殿で、1848(嘉永元年)年、藩主松平^{なりつね}齊典が建設した。当時は1000坪以上、16棟程の規模を誇っていたそうだが、こちらはこの玄関部分と家老の詰所しか残されていない。しかもこちらを訪れたのは月曜日で、残念ながらここに休館日であった。次回川越に行った際には、必ずここを訪れたい。

下の2枚の写真は川越城の一部、中ノ門堀跡(左)・富士見櫓跡(右)である。

まず中ノ堀跡を見て驚いたのは、城壁側の角度が非常に急だということだ。こんな急角度を上るのはなかなか骨折り仕事であろうし、何より上っている時に四角の小窓から攻撃されてしまうであろう。よく工夫された仕組みだと感心せざるを得ない。右の富士見櫓は、写真をご覧頂いてもわかる通り、現在は木々が生い茂り鬱蒼としているが、高台となっている。そのため、目線を遮るものは無いか少なかった当時は、その名の通り富士山も、やってくる敵もよく見えたことであろう。また川越城には天守閣が存在しなかつ



ため、富士見櫓は重要な建築物であった。この川越城の断片を見ても、非常に工夫されていることがわかるため、全体がもしまだ残っていたら、おそらくその城の機能としてのレベルの高さに驚いてしまうであろう。解体されてしまったことが残念でならない。

また、この 2 つは住宅地の中にぽつんとあり見逃してしまいそうであるが、逆に住宅地の中に歴史の 1 ページが残されていることを思うと、住民の方々は贅沢だな、と少し羨んでしまう。

3. 徳川家と喜多院 ―江戸時代―

そして私は川越城跡一帯を後にし、川越城跡の南にあり、平安時代の 830 年(天長 7 年)に創建され、江戸時代に拡大、そして今に続き川越大師として親しまれている喜多院へ向かった。その歴史はなかなか波瀾万丈である。

元々、この喜多院、創建された頃は「無量寿寺^{むりょうじゅじ}」という名でその歴史をスタートさせた。無量寿寺を開いたのは、838 年に遣唐使で唐に渡り、そして総本山の比叡山延暦寺が有名な天台宗の祖師の一人、慈覚大師円仁である。しかし、時代は下り、北条義時が執権となり、藤原定家らが新古今和歌集を編纂した 1205 年(元久 2 年)、一度戦火により炎上してしまったそうだ。その後、1296 年(永仁 4 年)荒れ果てていた無量寿寺を、尊海僧正という同じく天台宗の僧が、関東の天台宗本山仏像院(北院/他に仏地院(中院)、多聞院(南院))として復興させた。しかしまた、1537 年、前述した後北条氏の北条氏綱と上杉朝定との戦いの兵火により、炎上してしまった。既に 2 度も炎上しており、この喜多院の不運さを気の毒に感じてしまう。

その後、右写真の同じく天台宗の僧、天海大僧正(1536～1643)により 1599(慶長 4 年)に復興されたものの、1638(寛永 15 年)年、川越の大火により下の写真の山門(1632 年/寛永 9 年建立)以外の寺院内の建物は全て焼失してしまった。3 度も歴史上火災に遭遇してしまっている建物や寺社は、私が知らない



だけかもしれないが、なかなか多くはないのではないだろうか。しかし 3 度目の火災・川越の大火後には、かなり立派な建物が敷地内に建てられ、今に至っている。

…しかしこんな巨大な寺院になり得たのは、一体なぜなのだろうか。

それはなんといっても、喜多院を復興させた天海大僧正と徳川家との関係が大きな理由であるだろう。そもそも彼は、天台宗の比叡山を始め、数々の寺院や学校で学び、徳川家康と出会う前は武田信玄や後陽成天皇に法を説いていた。そして 1610(慶長 10 年)年に家康に会う機会があり、そこで家康に論議をしたところ、なんと家康の宗教顧問的な存在に抜擢されたという。数年後、仏像北院を現在の「喜多院」に改めた。その後も彼は秀忠、家光に仕えたため、前述の川越大火の際、喜多院の大復興も比較的容易に行えたのである。

では、その川越大火前後、家光の力もあり建てられた貴重な建物や展示物をいくつか見て行きたい。

まず、なんといっても始めは本堂をご紹介しますべきであろう。下の写真が本堂の「慈恵堂」である。こちらは川越大火の 1 年後の



1639(寛永 16 年)年に再建された。この本堂では、第 18 代天台座主(天台宗の総本山、比叡山延暦寺の住職)であり天台宗中興の祖、慈恵大師良源(912-985)が祀られている。また慈恵大師を囲むように、不動明王が祀られていた。由緒ある立派な本堂ではあるが、平日でも参拝する観光客でにぎわい、また前

を学生たちが通る通学路のようにになっているのを見て、人々に親しまれている寺院だということが



伝わってきた。また慈恵堂の隣には、天海大僧正が植えたと言われている榎の木がある。樹齢 400 年弱程だろうか。



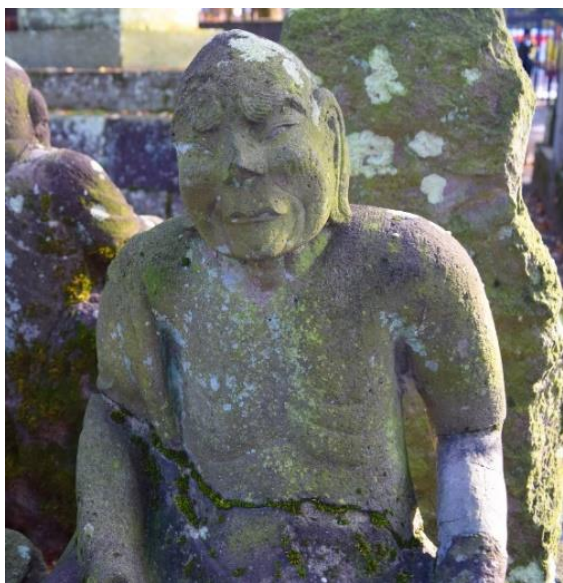
次は左の写真。よく紅葉とマッチし

そうな鮮やかな朱色が特徴の、「多宝塔」である。多宝如来を安置する塔で、上層が円形、下層が方形の二重塔だ。喜多院の多宝塔も例にもれずこの形式で建てられている。こちらも 1639(寛永 16 年)年に、先ほど紹介した山門の近くに建てられた。明治期と昭和期の 2 度この多宝塔は移築され、現在に至っている。高さは 13m 程あり、喜多院の中でも目立っていた建物だった。



最後は五百羅漢像。その名の通り、なんと 533 体の羅漢像と、中央高座に釈迦如来、両脇に文殊菩薩・普賢菩薩・地蔵菩薩・阿弥陀如来の像の計 538 体がここでは一挙に見ることができる。羅漢は悟りを開いた高僧のことを言うが、これだけたくさん像があるとありがたいが、なんだか混乱してしまう。面白いのは表情が一つ一つ違うことだ。いかにも悟りを開いたような無表情をしている像もあれば、微笑んでいるも

のも、そしてムスッとしている像、というようなバラエティに富んだ羅漢像に出会える。お気に入りの羅漢像を見つけてみるのも楽しいかもしれない。この五百羅漢は、1734(享保 19 年)年に川越の北田島という地区で生まれた打田善右衛門(後に出家し志誠と名乗った)により父母を供養するためにこの地に造られ始めた。五百羅漢だったきっかけは、当時五百羅漢信仰が流行だったから



だそう。造られ始めたのは1782(天明2年)年。しかし高座の如来像や菩薩像、そして羅漢像を40体程作ったところで、志誠は亡くなってしまった。しかしその意志を喜多院の学僧たちが引継ぎ、40年程のちの1825(文政8年)年に完成されたそう。そういった思いを知ると、初めて見た時の混乱は落ち着き、粛々と見ることができる。

そして、写真撮影は禁止されており、写真とともに詳しく述べることはできないものの、この喜多院の敷地内には、是非その目で見て頂きたいものがある。それは、家光によって川越大火後に江戸城から移転され設置された客殿と書院である。客殿は家光誕生の間や彼のお手洗い、書院は彼の乳母である春日局の化粧の間として使用されていた建築物である。また手入れの行き届いた庭園も美しかった。ちなみにこの客殿と書院、本堂の慈恵堂内部、五百羅漢像は拝観に大人400円が必要となる。お賽銭とは別に、小銭を用意しておいてもいいだろう。もし無い方は、敷地内に店出されている屋台やお土産屋さんで何か買ってみたいのでは。



また喜多院では、11月1日から23日まで、境内にて「菊まつり」を行っていた。なんと30回目の菊まつりということで、入口では菊で描かれた「祝30」の文字が私を歓迎してくれた。中に入ると、鮮やかな色をした菊・繊細な小さな花びらを持つ菊を思い思いにアレンジしてデザインされていた作品たちをたくさん見ることができた。中でも恐縮ではあるが私のお気に入りには下の3枚の作品だ。大輪の黄色の鮮やかな菊をたくさん大胆に使い、しかし所々アクセントか白い菊を添えて、円状にデザインした作品。迫力があつた。次は桃色の菊を使い、爪のようにデザインした作品。微妙な曲線を滑らかに表している。そして、喜多院多宝塔の模型の屋根部分に菊を置いた作品。最初

目に入った時は発想に度肝を抜かれた。



これらのバラエティ豊かな建築物や展示物がある喜多院を後にし、次は喜多院北参道入口付近の成田山川越別院に向かった。

4. 成田山川越別院と宗教 ―江戸時代―



真言宗の祖、弘法大師空海と、彼が魂入れを行った不動明王、交通安全と家内安全祈願、そして初詣の大混雑等で有名である千葉県にある成田山新勝寺はご存知の方も多いであろうが、この成田山新勝寺は、全国に8つの別院がある。その中の一つが、川越別院である。

この川越別院は、ペリーが浦賀に来航した年の1853(嘉永6)年、石川照温という人物によって建てられた。

この成田山別院が建てられた経緯は興味深い。彼、石川照温は、30歳頃に失明してしまい、自ら命を絶とうとしていた。しかも3度も、である。



しかし3度も失敗したが故に、逆に神仏は自分を見捨てなかったと彼は思い、成田山新勝寺にて修行を重ねた。その甲斐あってか、少しずつ視力が復活し、元通りの視力を取り戻したため、それに痛く感激した彼は、一念発起し諸国を巡礼し、不動明王の力を説いていった。そこに折しも廃寺となっていた本行院を地元の人、また当時の川越城主松平大和が再興し

ようとしていた所に、石川照温が居合わせたため、ここ川越に成田山新勝寺別院が建つに至ったのである。

前頁でもご紹介した五百羅漢像を造った志誠もそうだが、つくづく宗教の力というのは、人の言動や態度、そして大きく言うと古今東西歴史に作用してきたと、改めてこういったエピソードを知ると感じてしまう。



また境内には、私の出身四国に関した所があった。空海の立派な像とともにある四国八十八か所霊場御砂踏みである。四国霊場に行かれない人は、このそれぞれの霊場の境内から運んで来て埋められた砂の上に建ち、拝むことによってお遍路をしたのと同様のご利益が得られるそうである。ここ成田山川越別院に御砂踏みがあるのは、おそらく空海が四国八十八か所霊場の開創を行ったからであろうか。

八十八か所全ての写真を撮るのは時間がかかり、別の機会で、と思ったので今回は八十八か所の内、私の故郷から一番近い三

角寺の写真を掲載させて頂きたい。このようなそのお寺のご本尊とご詠歌が刻まれた石碑が八十八か所分ここには用意されている。もちろん、石碑の側面には、「同行二人」の言葉も刻まれていた。かなり狭い面積の中にこの御砂踏み場があるので、全て見て回るのは少し大変だが、一見の価値はあるだろう。

5. 新河岸川と蔵の街まで ―江戸時代、明治時代から現代―

今まで川越の歴史を江戸時代まで、川越の寺社・城郭等とともに見てきた。次は江戸～明治・大正にかけ、蔵造りの街並み・大正浪漫夢通りという商業地という側面から見てみよう。本レポートの冒頭部分でも紹介した一番街、いわゆる「蔵の街」は、1650年代前後、川越城主・松平信綱(在城 1639～1662 年/寛永 16 年～寛文 2 年、老中。島原の乱を鎮めた功績で川越城主となる。また後に明暦の大火の処理を迅速に行った。)時代の都市建設により整備された。その都市建設では、川越城周辺には当然、武家地が置かれた。そして少し離れた現在の一番街周辺に、町人地が置かれたのである。では、なぜ町人地が発展し、蔵の街が形成されたのか。答えの一つは右の写真の川が存在である。



氷川神社の東隣を流れている、新河岸川。松平信綱は、この新河岸川の価値に多いに着目し、利用した。これのおかげで、川越の商業が発展したといっても過言ではないだろう。新河岸川は、蛇行した川の流れであり、荒川と合流し、千住・浅草と通り、江戸まで出られる。ここに松平信綱は着目したのである。1638 年の川越の大火からの復興のための江戸からの資材運搬が、新河岸川舟運の芽吹きだったと考えられているが、その後江戸時代中はずっと、武蔵野からの農作物、そして江戸からの物資―新鮮な魚等が新河岸川を使い運ばれていた。そのため、問屋や河岸も他の地域のそれらと比べかなり多くの数があったそうだ。また、1830 年からの天保年間からは、夕方頃川越を出ると、翌日の正午頃に浅草に着くという旅客輸送も始まった。当時の感覚から見るとなかなか画期的な輸送システムだったのではないだろうか。一回で 30-50 人が乗っていたそうだ。このような江戸時代の川越―江戸間の舟運という輸送システムは人・金・モノを効率的に運び川越の商業も発展に多大な寄与をした。もちろん、お金も江戸から流れてきていたが、流行も江戸から来ていた。その結果が、蔵の街なのである。



というのも、耐火性の高い蔵造りは、火事が多かった江戸の街で考案され、広まっていた。江戸期は実際の所、あまり川越では広まっていなかったのであるが、川越に蔵造りの建物が広まる契機が明治 26(1893 年)年に起こる。川越の大火が再び発生したのである。人的被害は無かったものの、1300 軒もの家屋・商店が燃えてしまった。



この大火以来、明治 30 年代にかけて、雨後の筍のように、蔵造りの商店や屋敷が増えて行った。時の鐘も、寛永年間(1630 年前後)に最初は建てられたのであるが、焼失してしまい、明治 27 年に再建された。その後大正にかけ、復興も軌道に乗り、冒頭で紹介した現埼玉りそな銀行等も蔵造りの屋敷や商店に加えて作られていったが、折しも鉄道の時代が始まり、あまり当時賑やかではなかった現在の川越駅周辺に新しい市街地が広がっていった。そのため、この一番街の存在感は次第に薄れていった。しかし戦後、川越の大火を乗り越え 1792 年から約 220 年、この地に建つ大沢家住宅が重要文化財に指定されて以来、80 年代頃からこの街並みを保存、発展させていこうという機運が高まり、今のこの一番街の姿に繋がってきてい

るのである。

そして一番街の南側には、大正モダンの建築様式で建てられた「大正浪漫夢通り」商店街がある。元々は「銀座商店街」という名の商店街だったのであるが、こちらも一番街から遅れること約 15 年、平成 7 年にアーケード・電柱を撤去し、現在のこの姿にしたという。古いものを逆手に取り、情緒あふれる街並みにしてきた発想には脱帽せざるを得ない。川越は、たくさんの工夫が詰まった街である。



6. 最後に

今回、川越での散策では、最初に一番街を見終わった後、他の場所は川越市が管理しているレンタサイクルを見つけたため、自転車を使って川越散策を行った。利用料金は 200 円からと、タクシーを利用するより安く、またバスを利用するより小回りの効く移動手段だったと思う。このような仕組みが整えられ、私のような一観光客が非常に散策しやすい川越に、そして何より、散策するのに十分過ぎる程の歴史的建造物や歴史そのものを重ねてきている、そして重ね続けようとしている川越に私は強い魅力を感じた。また過ごしやすい季節になったら、ぜひ訪れてみたい。

進藤竜一

川越市簡略図

